



ステファニー・バトン・ブランド氏とカンパニーSBBのダンサーたち

ダウンタウンの聖地

「ラママは俺がこのキャリアをスタートした場所だ」と自慢げに話す照明さんを少なくとも3人知っています。「ラママ」とはアフリカン・アメリカンの舞台芸術家、エレン・スチュアート氏によってマンハッタンの下町に1961年に創立されたオフ・オフ・ブロードウェイの劇場コンプレックス、La MaMa Experimental Theatre Clubのことです。ラママが原点だと話す彼らの一人は30代、残りの二人は60代。どの武勇伝にも共通するのが、皆大学を卒業してまもない頃、収入も技術もあまりなかったけれど舞台照明に熱中した良い時代、ということです。ドアをたたいて「ここで働かせてください!」という飛込みが許された、数少ない劇場の一つだったようです。2011年スチュアート氏他界を経て、現在は299席のエレン・スチュアート劇場と99席から130席のダウンステア劇場に加え、ギャラリーと3つのリハーサル・スタジオを持ち合わせた施設です。

上の写真はエレン・スチュアート劇場、ラママの中で一番大きなスペースです。私はこの劇場が大好きです。空間の持つ匂いが良い。舞台芸術の匂いがして、創造と共同制作に集中できる絶好の空間づくりに一役買っています。「この劇場は高さが良い」と良く聞きますが、床から約23尺なので、ニューヨークにある同じくらいの席数をもつ他の劇場と比べて、特別に高い天井というわけではないように感じます。ただ、オフ・オフ・ブロードウェイのブラック・ボックス劇場はだいたい床から天井まで10尺くらい、劇場というより部屋といったほうが想像しやすいほど天井が低いので、それに比べると23尺は極楽です。また、この劇場は奥行きが素晴らしい!客席一列目から奥の大皿まで約54尺です。上の写真は通常の客席の平台が組まれているのですが、客席の位置も主催者次第で変更可能だそうです。ただ、この平台は本当に重いので、これを全部動かすにはかなりの人手と時間がかかるなあという印象です。

そんなダウンタウン劇場街のメッカともいえるラママは、いつ来ても「ここで働きたい」と思わせる魅力満載な反面、精一杯の成果を残すためにはちょっとした工夫が必要です。先述のように、情熱にあふれた若手オペレーターたちと一緒に物づくりをする時間となるため、作業工程に多少の余裕を持って計画することをお勧めします。初めて器材に触れるというオペレーターがジニーに乗って照明をフォーカスすることもあり、スポットのマキ・バラシヤピントの合わせ方など、レクチャーが必要なきももあります。また、オペレーターがジニーに乗って作業している真下には絶対に立たないことです。何か落ちてきて怪我をしても、フリーランサーの私たちには何の保障もありません。ユニオン小屋ではないので役割分担に厳しい決まりはありませんが、どんなに(プロの)人手が足りなくても、自分で器材をさわりにいくことは控えたほうがよさそうです。オペレーターを辛抱強く待つか、待つ時間が無いのなら事前に主催者からプロを増員してもらおうのが筋でしょう。

エレン・スチュアート劇場で10月にオープンした『Look who's coming to dinner』は、1967年12月公開のアメリカ映画『招かれざる客』を元にステファニー・バトン・ブランド氏が振付、演出、装置を担当した舞踊作品です。その映画が公開された6ヶ月前の1967年6月まで、アメリカでは17の州で人種間の結婚が違法でした。今となっては人種の壁を越えた結婚が珍しいことではなくなりましたが、それでもやっぱり人は比較で物を判断する生き物であるがゆえ、また自分と似たものに好意を抱く傾向があるため、形質的特徴が個々の選択と生き方に与える影響が皆無とはいいがたいです。ラママ誕生から約60年。同じくらいの月日を経て改めて見直す『招かれざる客』は、『Look who's coming to dinner』通して人種に関係なく美しい人体と、他者と向き合うことを尊重する意識を私たちに伝えていよう。